



梅の花香る好文亭

土木遺産の香 第73回

梅の花香る「水戸偕楽園」 茨城県、水戸市



八千代エンジニアリング株式会社／経営企画本部／経営企画部
箕輪 知佳／MINOWA Chika
(会誌編集専門委員)

世界第二位の都市公園

茨城県水戸市にある偕楽園は、石川県金沢市の兼六園、岡山県岡山市の後楽園とともに日本三名園の一つに数えられる。春は桜やつつじ、秋には萩、冬は二季咲桜と1年を通して様々な花が季節を届けてくれるが、偕楽園と言えど何と言っても2月下旬から3月下旬にかけてかぐわしい早春を告げてくれる100種3,000本の梅が有名である。

1842（天保13）年に建設された当時の規模は、現在の常盤神社の境内を含み14.7haであったが、1993（平成5）年に大規模公園として整備されたことにより、偕楽園の南東に位置する周囲約3kmの千波湖が「偕楽園公園」の一部となり、規模が300haとなった。これは、都市公園としてはニューヨーク市のセントラルパークに次ぐ世界第2位の広さである。2015（平成27）年には近世日本の教育遺産群として日本遺産にも認定された。

偕楽園を造った徳川斉昭

偕楽園は水戸徳川藩第9代藩主徳川斉昭^{なりあき}により、水戸城下郊外の常盤村に創建された。造園構想は斉昭自らが行った。江戸幕府最後の将軍徳川慶喜の実父でもある斉昭は、諡号^{しごう}の「烈公」からも分かるように、まさに幕末をその荒々しい気性で生き抜いた人物であった。

斉昭は1800（寛政12）年3月、水戸藩江戸小石川藩邸で生まれ、会沢正志斎^{せいしさい}のもとで水戸学を学び聡明さを示した。幼少期から水戸学の影響を受けていたため開国には猛反対していたが、西洋の物品には大いに興味を示したという。1829（文政12）年、第8代藩主斉脩^{なりのお}が病で亡くなったため、弟の斉昭が30歳で家督を継いだ。

斉昭は漢学、国学、書道、絵画、音楽、茶道、さらに文芸百般にわたって専門家より教育を受け、また熱心に身に着けようと学んでいた。「日本はどういう国柄であるのか」「政治の焦点はどこにあるのか」「世界の情勢はどうなっている



図1 好文亭四季模様之図（大洗町幕末と明治の博物館寄託）



写真1 上空から臨む千波湖

のか」等の認識を深め、これらを持って「現在の日本はどうあるべきか」「水戸藩の政治はどうなっているのか」「藩の財政はどうか」と考えた結果、これらに対し根本的にメスを入れる必要があると結論を出した。

1837（天保8）年には『経界の義』（全領検地）、『土着の義』（藩士の土着）、『学校の義』（藩校弘道館及び郷校建設）、『総交代の義』（江戸定府制の廃止）を掲げ、水野忠邦の天保の改革に示唆を与えたと言われている。このほかにも、『追鳥狩^{おいとりがり}』と称する大規模軍事訓練を実施したり、農村救済に穀物蔵の設置をするなどした。さらに国民皆兵路線を唱えて西洋近代兵器の国産化を推進し、蝦夷地開拓や大船の建造も幕府に提言している。強い信念で改革を断行していく中での政策の一つが偕楽園の建設だった。

幕末期に人材の少なかった徳川家では唯一のカリスマ性と行動力を持ち合わせた人物であった斉昭は、なぜ水戸の地に偕楽園を造ったのだろうか。

常盤村に偕楽園を造った理由

偕楽園建設の計画自体は、斉昭が藩主として初めて水戸に来た1833（天保4）年に考えられた。建設地の決め手は、斉昭が領地巡回をした際に千波湖や筑波山、大洗の海を遠望できる領内随一の景勝地をここに見出したからである。しかし、この年は大飢饉のために計画が進まず、翌年にその準備の第一段階として神崎の地（水戸市）に数多くの梅樹を植えさせた。そして1841（天保12）年4月から造園工事を行い、翌年7月1日に開園したのである。偕楽園の名称は『孟子』にある「古（いにしえ）の人は民と偕（とも）に楽しむ、故（ゆえ）に能（よ）く楽しむなり」から取ったものであり、「領民と偕に楽しむ場にしたい」という意味が込められているという。

伏せられた軍事目的

一般的に言われている偕楽園創建の目的は3つある。

- ① 質素儉約の時代だった当時は、江戸でも水戸でも三味線を弾くことさえ禁止されていた。酒宴も禁止で、衣類は本綿が基本とされていた。しかし、それでは臣下も民も楽しみがなくなってしまう。せめて「庭園の花を眺める楽しみは与えるべきだろう」という妥協の姿勢から偕楽園が生まれた。
- ② 勉強や修行の場である藩校弘道館に対をなす一体の施設として、休息の場とする偕楽園が創建された。
- ③ 城中で火災等が起こった時のための避難場所として位置づけられた。

しかし、当時斉昭が太平洋上に現れる外国船に対して日本領土侵略の国家的危惧を感じていたことなどから、偕楽園創建は国防のための軍事目的が真の理由であったともいわれている。そこには二つ目的があったが、幕府の法度に抵触するため、民と共に楽しむ^{ゆうゆうそんよう}優游存養を強調した『偕楽園記』を発表し、その目的は伏せられていた。

- ① 偕楽園の中心的建物である好文亭の3階からは太平洋も臨めることから、戦の際の海岸防御の一環として、城塞の守衛の堅固化を目的として建設された。
- ② 梅は花を楽しむことが目的ではなく、その実を戦や飢餓の際の非常食とするために梅の自給自足を図った。

もう一つの家、好文亭

斉昭の別邸でもあった好文亭の設計は、側用人の小山田軍平や町奉公の原魯齋らによって設計された。斉昭自身の考えも加えられながら、設計図は斉昭の自筆で描かれた。植栽はその道に詳しい長尾佐太夫景徳が采配を振るった。ここは斉昭の別邸としてだけでなく、文人墨客や家臣、領地の人々を集めて詩歌の宴を催したり、養老会の開催場所としても利用されていた。

「好文」とは梅の異名で、晋の武帝の「学問に親しめば梅が咲き、学問を廃すれば開かなかった」という故事に基づく。当時、3階以上の建物建設には幕府の許可が必要だった



写真2 弘道館の正門と正庁



写真3 偕楽園碑

る知識も豊かだったことがうかがえる。

文武両道の弘道館

水戸藩校の弘道館は、日本最大となる17.8ha（東京ドームの約4倍）の敷地を有しており、これほど広い藩校は他藩では例を見なかった。敷地には学問を学ぶ文館、武術を修練する武館の他、医学館や天文台、馬場、調練場等があった。敷地の中央に立つ八卦堂には『弘道館記』を刻した

石碑「弘道館碑」が納められた。『弘道館記』は斉昭が草案し、自ら揮毫したもので、設立理念を文章化したものである。中心となる考えは徳川家康の「尊王攘夷」の功績を称え、その志を継いだ水戸藩士が実践的な教育訓練をする場として設立されたことが記されている。

弘道館の建設は斉昭が推進した藩政改革の中でも重要な施策の一つである。鎖国を続けていた日本に対し、開国や貿易を迫り、ついには水戸藩の海岸にまで現れた外国船に危機感を募らせた斉昭は、日本の独立を守り、国や藩を

たため、外見は2階建てだが中は3階建ての2層3階建てとなっている。1945（昭和20）年の水戸空襲により焼失したが、1955（昭和30）年から3年かけて復元された。

また、あまり知られていないが、日本で初めて設置されたといわれている木製エレベーターがある。食事などを1階から3階まで運ぶためだが、いざという時の緊急避難路のためにと斉昭が考案した。他にも眺望や風通しと採光に優れた3連障子、戸を開けなくても中の様子がうかがえる特殊な取っ手、約8,000もの韻字（漢詩文で韻をふむために句末に置く字）が書かれた辞書代わりの板戸など、好文亭は一風変わった工夫が随所に施されており、他に例のない建物である。

職業的な建築家が存在しなかった当時、大工職に全てを任せるか、もしくは意を凝らす必要のある場合は、建築主が自ら大工にその計画を示さなければならなかった。このことから、斉昭が科学的素養に富み、土木建築に関す



写真4 偕楽園内から千波湖を臨む



図2 徳川斉昭直筆の好文亭設計図



写真5 当時の姿で佇む表門



写真6 紅に染まるもみじ谷

発展させるには優れた人を育てることが大切だと考え、人を教育するための学校開設を決意した。ここでは学問と武芸の両方を重視した文武両道の教育が行われ、バランスの取れた人間の養成を教育目標とした。門閥派を抑えて下土層から広く人材を登用するために、藩士とその子弟のうち15～40歳までの者すべてに弘道館入学が義務付けられていた。15歳未満は私塾で学ばせ、塾の指導者からの申請により随時入学を許可するというシステムである。また、生涯教育を原則としたため、40歳以上の登校は任意であった。

弘道館は一見して偕楽園とは何の関係も無いように見えるが、実は深い繋がりがある。『偕楽園記』によると、「礼記」にある「一絀一弛」（厳しいだけではなく、時には緩めることも大切だという考え）に基づき、「弘道館は『一絀』、偕楽園は『一弛』である」と明確に位置づけられている。つまり、弘道館が文武修行の場であるのに対し、偕楽園は修行の余暇を利用した休養の場なのである。

弘道館も偕楽園同様、2015（平成27）年に近世日本の教育遺産群として日本遺産に認定された。創建当時から現存する正庁、至善堂、正門は重要文化財に指定されている。

偕楽園の楽しみ方

偕楽園に正規ルートがあるのをご存じだろうか。現在は多くの人が東門から入園しているが、開園当時から現存する好文亭表門（正門）から入ると、まっすぐに伸びた孟宗竹林や大杉森に囲まれた静寂な世界が広がる。その道を抜けて中門をくぐると、急に梅の香りが漂う明るい世界が目の前に広がる。これが斉昭の作った「陰から陽への世界」である。この暗さと明るさの対比には、儒教の精神が反映されているという。この約1,000本の竹は弓の材料として京都男山の竹を移植したもので、ここでも軍事的のためにという斉



写真7 表門から広がる孟宗竹林を仰ぐ

昭の周到さが垣間見える。

梅をはじめ、四季折々で美しい表情を見せてくれる偕楽園。170年以上も前に斉昭が命名した名の通り、現代の世でも多くの人々に愛されているが、建設に至った真の目的を知ると、また違った視点で楽しめるのが面白い。

<参考文献>

- 1) 「水戸の心」関弧園 1997年 川又書店出版部
- 2) 『偕楽園歳時記』松崎睦生 1978年 晩印書館
- 3) 「水戸茶道史考」伊豆山善太郎 1988年 新いばらきタイムス社
- 4) 『偕楽園の現状調査報告書』1979年 茨城県
- 5) 「史跡名勝 常磐公園内 好文亭及び庭園復元工事報告書」1961年 茨城県
- 6) 「水戸の日本遺産を歩く」水戸市
- 7) 「大名庭園」白幡洋三郎 2013年 平凡社

<取材協力・資料提供>

- 1) 茨城県水戸土木事務所偕楽園公園課
- 2) 大洗町幕末と明治の博物館
- 3) 茨城交通株式会社

<写真提供>

- P40上、写真1、2、6 茨城県水戸土木事務所
図1 大洗町幕末と明治の博物館／茨城交通株式会社
図2 文献4より
写真3 高橋真弓
写真4 文献7より
写真5 塚本敏行
写真7 箕輪知佳